すみよし

２０１３年　クリスマス号　第１９１号

【　聖　句　】

神は、独り子を

世にお遣わしになりました。

その方によって、

わたしたちが生きるようになるためです。

ここに、神の愛が

わたしたちのうちに示されました。

ヨハネの手紙一　４章９節

選　：　T.K.

目次

≪Where is Christ in Christmas?　クリスマスの中のキリスト≫

ジョン・オマリー神父

１２月初旬から新聞広告ではデパートのクリスマスセール、ホテルで開催されるクリスマス・ディナー・ショー、そして洋菓子店のクリスマス・ケーキの案内が掲載されています。これら全てはキリストとどういう関係があるのでしょうか？　私が来日した５６年前では１２月になると歳末セールと忘年会が盛んでした。しかし忘年会でお食事とお酒をすました後に、お父さん達は家族の為にデコレーション・ケーキを持ち帰りました。それはクリスマス・ケーキと呼ばれていましたが、アメリカではデコレーション・ケーキは一般的にはお誕生日の時のケーキです。その家族達はイエス・キリストの誕生日をあんまり意識せずに、ケーキを楽しんでいたのではないでしょうか。
しかしキリストは家族が一緒にバースデーケーキを囲み、共に和やかに過ごしているのをごらんになり喜ばれた事でしょう。なぜなら神の子が人間になったのは、人々が一緒になり分かち合う喜びを得る事の為だったからです。全ての人々が同じ家族になるためだったのです。

最近では１２月になると街中や近隣の個人の家々でもイルミネーションが増えました。この明かりは暗い１２月の日々の間、私達を元気づけてくれます。なぜ私達が世の光であるイエス・キリストの誕生をお祝するかという間接的なもう一つの印です。救い主は人々の心に光と喜びをもたらす為に誕生されました。特に私達キリスト者は失望、挫折と失敗を乗り越えられるようにと頂いた贈り物である信仰をとおして、希望と喜びを得ています。私達の心の中に毎日キリストが誕生されるように祈り、皆がイエス・キリストの信仰の喜びを知るようにしましょう。全ての外観的なクリスマスのデコレーションの中でも、探せば私達はキリストを見つける事ができます。

秋のバザーでの神父様

≪目　次≫

☆ 聖句　選・T. K.　・・・・　1
☆ 巻頭言　オマリー神父　・・・・　2
☆ 目次　・・・・　3
☆ 池長大司教　司牧訪問　・・　4～5
☆ 待降節　黙想会クラレチアン宣教会　梅崎　隆一神父　・・　6～7
☆ 信仰年閉幕にあたりこの１年間の振り返り　Y. U.　・・・・　8
☆ 幼子イエスを待つために　・・・・　9
☆ 恵(敬)老の祝福、お祝い会　・・・・　１０～１１
☆ 私の信仰はどこから？　M. K.　・・・・　１２～１３
☆ 教皇様と共に祈りましょう　M. T.　・・・・　１４～１５
☆ 超高齢社会での終末期医療に思う・第３回　・・・・　１６～１７
☆ セニョール・デ・ロス・ミラグロス（奇跡の主）　・・・　１８
☆ 亡き方の為の祈念ミサ・追悼式　・・・　１９
☆ 追悼文「父という人」　S. N.　・・・・　２０～２１
☆ ２０１３・バザーを終えて　M. N.　・・・・　２２～２３
☆ 幼児洗礼・七五三のお祝い　・・・・　２４～２５
☆ 図書紹介　N. K.　・・・　２６
☆ （　教会日誌・信徒動静　・・・・・　27）
☆ 教会案内・後記　・・・　２７

題字　：　山際　純子
表紙画　：　多月　弥生

≪池長大司教　司牧訪問≫

10 月 13 日　年間第 28 主日

穏やかな秋の日、池長大司教が住吉教会を司牧訪問され、主日のミサを司式下さいました。ミサ後は信仰年後半にあたりご自身の今年の学びと気づきを語られました。

第一朗読：列王記下 5・14-17
第二朗読：テモテへの手紙二 2・8-13
福音朗読：ルカ福音書 17・11-19

お説教から

今日は、第一朗読・福音朗読ともに、皮膚病が癒される奇跡の話です。
これらを聞いて私たちは「既に知っている話だ」と聞き流したり、「自分とは関係がない」と読み流したりしていないでしょうか。
大司教は「重い皮膚病」を「自分自身の内に潜むどうしようもないもの、自分の中に積もった汚(けが)れ」とたとえられました。
私たちは日々の生活で、自らの汚(けが)れに慣れてしまうことがあります。
時に、自分の内面に向かい、小さなものにいたるまでしっかりと見つめ直す。すると自分の生き方や態度の中に積もる汚(けが)れに気づき、陥りやすい悪の傾向が見えます。自分の内面を熟思した後は、神に向かい合い、神の前にありのままの自分を差し出します。そして「私を徹底的に洗い清めて下さい」「私を完全に赦して下さい」と祈り乞い願います。最後は神へ心からの感謝を捧げます。
これが本当の信仰者の姿です。

ミサ後のお話から

「信仰年にあたり、ここに集う一人一人の心に響くものがあり、信仰に向かうこれまでとは違ったものが生まれますように」の祈りに続き、大司教は今年ご自身が担当された典礼憲章のレクチャーからあらためて気づかれたこと、これまで以上に「神の無限の世界」を「現実の世界」と、はっきり意識できるようになったことを力強く話されました。

第二バチカン公会議を機に教会は大きく変わりました。目に見える形では、長方形の聖堂が祭壇を囲む形になり、荘厳で遠く仰ぎ見た祭壇は信徒により近くなりました。ミサはラテン語から各国語へと変わり、聖歌隊は聴くだけのものであったのが母国語で共に歌えるものになりました。

これらはすべて、第二バチカン公会議以前「キリストの神秘体」とされた信仰者が「神の民」へと置き換えられたことによります。「キリストの神秘体」にはヒエラルキア（位階制）が存在しました。キリストを頭に代理者である教皇、聖職者、信者のピラミッドです。しかし「神の民」と置き換えられた私たちはピラミッドではありません。神のもとに、神から平等に愛され、地面に広がる群れのイメージです。
共同体のあり方も同じです。神から愛される存在として、ともに考え発言し、皆で築いていく教会が「神の民」にふさわしいと思います。
いつも自分に向かっていて下さる神を意識し、信仰者としてしっかりと神に向かい合う自覚と意識を高めていきましょう。

大司教のお話を伺い、我々信徒一人ひとりが信仰の内に心を新たにし、住吉共同体の一致に向けて進んでいきたいものです。　　編集部

大司教の祝福

遠いお国のお話ですか？

目次

≪待降節黙想会≫

講話　　梅崎　隆一神父
（クラレチアン宣教会）２０１３・１２・１

「私が神父になったのは・・・」

２０００年に叙階して１３年目の４３歳です。両親は長崎県五島列島の出身ですが、私は大阪枚方で育ちました。

子供の頃悪ガキだった私はよく教会で遊んでいました。広場にブロックを並べて遊んでいると、ひとりの神父さまは「面白いからもっと遊べ」と言う。次に来た神父さまは「片づけなさい」と言う。するとはじめの神父さまは「なぜ片づけよと言うのか」と言って、２人はスペイン語で言い争うのですが、私にはさっぱり分かりません。
でも「**神父は他の大人とはちがうなぁ**」と思いました。それは子供の私にもその言い争いが「自分の考えを押し付けるのではなく、子供たちにとって、何が大事かを考えてくれている」からだということが伝わったからです。

当時教会の教えでいやだと思ったのは、「この世でいい事をした人は天国に行き、悪いことをした人は地獄に落ちる。ほとんどの人は煉獄に行く」と言われたことです。中学ではテストが何より大切で、１９８０年代は校内暴力もひどく、いじめもありました。　「いじめられている子を助けるのがキリスト者だ」と思ってはいたけれど、勉強の出来ない子は人生の落伍者と言われていた風潮のなかで、私にはとてもその思いを実行することは出来ませんでした。教会の教えと世間の価値観の板挟みになり、**「全知全能の神は何でこんな世の中を造り、こんな事を許しているのか？」**と思い悩みました。

高校では力の強い者が上に立つのです。勉強の出来ない子（弱者）はもう一段弱い者を探していじめる。教会的にみると、地獄行きの者ばかりだったのです。
日曜日の教会で侍者をする時だけが、唯一自分の存在価値を示すときでした。日曜日きらびやかな日、月曜日から土曜日は地獄でした。
台風や地震や病気、政治汚職などのない完璧な世界を造らずに、うまく生きられない者を地獄に落とし、強い者を天国にあげるという神はサディスティックなのかと思ったりしました。

そんな時、友達から「一緒に神父になろう」と電話がかかってきました。「神から見捨てられていないのなら、神父になろうかな？」と、英知大学に入りました。そこで色々なことを教わり、**自分の世界観や教育についての考え方が変わりました。**
大学では、知識を詰め込むのではなく、「自分の持っている役に立たないものを捨て、残ったものが大事なものだ」と教えられ、目からウロコでした。

ギリシャの哲学者**ソクラテス**は「知らないのに知っていると思い込んでいる人たちより、知らないことを知らないと自覚している自分の方が賢い」と無知の知を自覚し、人間にとって一番大切な善を知ることの喜びを伝えようとしました。
ペスタロッチは１８００年に初めて貧しい戦争孤児たちのためにスイスに小学校を作り、どんなに貧しい子供たちでも「教育によって子供たちは変わり、人間の中に輝いているものを見つけ、育てる」ことを信念としました。
明治５年日本に出来た学校は、**福沢諭吉**の「学問のすすめ」にもある通り、「国が強くなって儲かる世の中を作る」ための教育であり、勉強の出来る＝尊い人を作ることにあり、立身出世のための教育だったのです。
その後の日清戦争でも、勝って多額の賠償金を得た日本では、子供の幸せはお金の儲かる給料取りになることだと、そのために勉強したようです。

私の**人生の転機**となったのは、**「復活の主、イエスキリストに出会った」**ことです。
教会でも関連の場でもなく、通学途中の京阪電車の中で神は「私はあなたを愛しています」と言われました。
「では、なぜこのような苦しみの多い世の中を造ったのですか？」と問うと
「私はこの世界を救いたいのです。それは人間が作ったものでしょう」と答えられました。私はこの時イエスの肉声を聞いたわけでもこの目でみたわけでもありません。けれどイエスに出会った事を確信しています。なぜかというと**「私の人生がその時から変わった」**から・・
それだけなのです。

信仰の根幹は復活した主キリストに出会うことです。
弟子たちが復活したキリストに出会ったという証言が嘘だと証明出来れば、教会は消滅すると思っています。イエスに出会って自分が変わっていく体験が大切なのだと思います。

社会の中で言われている賢さは私にはありませんし、神とは関係のないさまざまな苦しみがこの世の中にはありますが、**沢山の人たちに出会い、神に出会って回心し、ものの見方が変えられたこと**が、私の神父になった原点なのです。

（編集部）

目次

≪信仰年閉幕にあたり、この一年間の振り返り≫

評議会議長　　U.T.

このテーマに最もふさわしくない私が、原稿を書くということが信仰年の主の恵みだと受け止め、祈りとともに振り返ってみることにします。

信仰年は教皇ベネディクト十六世の呼びかけにより、２０１２年１０月１１日に開幕しました。大阪教区の信仰年開幕ミサには当教会滝川議長が出席され、神戸地区代表として信仰年のロウソクを奉納し、神戸地区は住吉から信仰年のロウソクが灯され、２０１３年１１月２４日の王であるキリストの祭日に開催された信仰年閉幕ミサ（カテドラル）において洲本教会から帰ってきたロウソクを中ブロック代表が神戸地区を代表して奉納しました。

信仰年のこの一年間、住吉教会ではミサの開始時に「信仰年の祈り」を唱えてきました。私自身、漫然と唱えてきた感があり、もっと噛み締めて祈れば良かったと反省しております。

さて、カトリック中央協議会の「信仰年を迎えるにあたって日本の教会の課題」では、教皇の意向である「カトリック教会の信仰の遺産を保持した上で、新しい時代への適応を打ち出した第二バチカン公会議の教えをどのように実施しているかを振り返り、これからの歩みを整え、『カトリック教会のカテキズム』を学び、その内容を確認した上で信仰生活を刷新することを目的としていることに従い、第二バチカン公会議が打ち出した信仰の刷新と５０年の日本の福音宣教の歩みを確認し、推進する年にしようと考えています」と述べられています。

福音宣教（人々とその文化・社会の福音化）、新しい福音宣教（２０１３年１０月、世界代表司教会議のテーマ）の重要な課題があり、日本の教会は日本二十六聖人殉教者の列聖と再宣教１５０周年に当たっています。４年前にはペトロ岐部と１８７殉教者列福の恵みをいただき、現在は２０１５年に向け、高山右近の列福を願っております。来年の復活祭の１週間前の４月１２日（土）には「高山右近　列福を祈る巡礼」バスツアー（８：４０～１８：００、日帰り）が神戸地区において計画されています。

ぜひ多くの皆様とともに参加出来ますように祈っております。

「信仰とは所有するものでなく、分ちあうものだということを思い出しましょう。すべてのキリスト教徒は使徒なのです。」

（教皇フランシスコ発信のツイッターより：信仰年閉幕ミサで配布されたカードより）

目次

クリスマスおめでとうございます

幼子イエスを待つために

主よ　あなたの馬小屋の　幼子イエスを待つために
私は新しい服が着たいのです。
傲慢、偏見、欲深さ、ねたみ、わがまま、不誠実
そんな服は着てないと
自分でいくら思っても
あなたの目からご覧になると
私はどんなに写るでしょう。

主よ　あなたの馬小屋の　幼子イエスを待つために
私に気付かせて下さい。
自分の小ささを知り、赦す事、赦される事を知り
心を静かに整えて
あなたの訪れを待つために
私は古い服をぬぎ棄てて
新しい服が着たいのです。

主よ　私の願いを聞き入れて下さい。

目次

≪　恵老のお祝い　≫　　9 月 15 日（日）

今年も教会では１日早い日曜主日のミサの中で、恵老（敬老）の日のお祝いがありました。赤波江神父より全員聖水で祝福をして頂き、今年も元気に恵のこの日を迎えられた事に感謝しこれからの日々も主に守られ主と共に歩んでいけるようにと祈りました。
ミサ後、奥の会議室に心づくしの御馳走が準備され、皆で乾杯！
賑やかな談笑の中、楽しいアトラクションが始まりました。
最初は今年の夏、中高生とリーダー達がフェリーと車で旅した大分巡礼の様子が映されました。修道院や教会を巡礼訪問し、祈り、人と交わり楽しく学んだ様子が参加した大学生より説明されました。巡礼という旅を共にする数日の間にも彼らの成長が見て取られ嬉しい知らせでした。ＨＰの係からは、今年の大きな行事の一つとして、バチカンから全世界にインターネット配信されたニュース「２０１３年７月、ブラジル・リオデジャネイロで開催された聖体賛美式、聖体行列、ワールドユースデー」の中から抜粋編集された映像が映されました。南米の方達の神との向き合い方、とりわけ教皇フランシスコへの絶大なる歓迎と教皇の親しみの溢れた笑顔、司式での祈りのお姿が克明に写されていました。
パソコンをしない方から、普段あまり詳しく見る事のできないこのようなニュースを見られてよかったとの声がありました。
最後に子供たちが準備した恒例の文字並べゲームで頭をひねった後、皆で聖歌を合唱し、神に感謝の祈りをささげました。

おめでとうございます。乾杯！！

大分巡礼の報告 by 中高生会

<u>バッタの話</u>

ある町に一匹のバッタがいました。
名前を「行き当たりバッタ」と言いました。
毎日、そのバッタは気ままに生きていました。

ある日、気が付くと体中にシミが出ていました。
お医者様は「苦シミ」と「悲シミ」のシミだと言いました。

果物を食べなさいと言われ柿を食べました。
しかし、治りません。
お医者さんは「あなたが食べた柿の名前が悪い」と言われました。
それは「モガキ」と「アガキ」という柿だというのです。

「どうすれば良いか」と尋ねると
「この裏の崖を登りなさい」と言われました。
その崖の名前は「命崖」と言います。
苦労してやっとの思いで登ると
素晴らしい景色が見えて気持ちが爽やかになりました。

すると、不思議にその時から体のシミがすーっと消えました。
そのバッタの名前は「ガンバッタ」という名前に変わりました

そのバッタの名前は「ガンバッタ」という名前に変わりました

目次

≪私の信仰はどこから？≫

M.K.

昭和の初期、私は１０代で女学生（中学・高校）だった。父は当時、大阪に組立工場を持つＧＭゼネラルモーターズで仕事をしていた。父は学生時代英語が好きで、昭和初期に近江八幡に来ていた宗教家であり建築家としても知られていたウィリアム・メレル・ヴォウリスに愛され、殆ど彼の事務所に入ることになっていたが、酒も煙草もノーという厳しさには辛抱し切れずに、辞してＧＭに誘われたと聞いている。ただ、ヴォウリスのクリスチャン精神はしっかりと心に得てか、日曜日には必ず家で父がオルガンを弾き、母と私が讃美歌を歌ったりしたものだった。
又、私はキリスト教会の日曜学校にも行かされたが、教会の集いは感じることもなく、帰りに買ったアンパンの美味しさだけが今も心に残っている。
母は女学生になった私の心に何かを持たせたくて他の教会に連れて行ったり、天理教、その他の集会に行ったりしたが、私の返事はいつも「あの会に行ってもやっぱり心に得るところがなかったら、それこそどうしたらいいの」だった。

信仰の第一歩
そんなある日、尊敬している国語教師の D さんの大阪の下宿を訪ねた。先生は外出中で、すぐ帰るから本でも読んで待つようにと置手紙があったので、机の上の本をぱらぱらと見ていると、一冊のノート。雑読を薦められていたので、書評かなと見ていくと「三位一体」とか「霊魂の不滅」などの文字が目に入り、いつか深く引き込まれているうち先生の帰宅。
ノートを読んだ失礼を詫びながらも、こんな内容の話は今まで聞かされたことがないと問うと、「外国の随筆や小説を読むのに、その国の宗教を知らなくては・・・・勉強しているの」と。それから二人の間で質問、疑問、討論と続き、そんなに心にかかるならあなた自身神父様に聞いてごらんなさい、と近くの教会に連れて行かれた。それが現在の玉造カトリック教会だった。今のように司教座のある立派な教会ではなく、当時はささやかな聖堂で内部は畳敷き、すぐ横に小さな司祭館があり、そしてお会いしたのは都田神父様。私の初めての指導者となる方であった。神父・先生・私と三人の討論は長く続き、その後もお話を聞くために母と何度も通いミサにもあずかっていたが、時の流れはしだいに戦争に近づき、私は女子専門学校を卒業後、交易営団で戦時用金属・ダイヤモンドの回収を行っていたが、戦局が濃くなるにつれ、女子は軍需工場に行くか学校教師になるかでないと徴用に取られるというので、小学教師を選び、石川県の能登島に転入された。島は本土からの橋もなく、七尾から船で半浦（はんうら）に着き、西島に下宿した。そこから小学校までは片道一里の山道で、生まれて初めての草鞋を履き、すっかり足を痛めてしまった。学校に通うのも無理なので近くの分校に移り、一年生から四年生を一室で教えることになった。いろいろと大変なことが多くあった中、洗礼こそ受けていなかったが神に祈ることができ、周囲の人々も暖

かく、戦時下に苦しむ都会の人々に申し訳ないほどゆったりと過ごせた日々であった。特に子供たちはおおらかで、いじめも遊びのうちの様子で、２１名の小学生にこちらが守られているような思いだった。

終戦後、家族三人そろって神戸に住めるようになり、最初に母と行ったところはカトリック教会探しだった。焼け残った下山手の教会に入ると、屋根の修復を指図している人を見てびっくり、都田神父様との再会は神の御恵みに思えてならなかった。さっそく勉強を再開して二人そろって洗礼を受けた。又、神父様のお話の中に、戦火で多くのものが焼け、ミサに着る祭服もないとのこと、母はほとんどの衣類を米に変えてしまっていたが、ただ一つ大切に残していた私の丸帯を祭服にしていただけないかと差し出した。その時はカメラに収めることもできなかったが、輝くばかりの祭服になったときは本当にうれしかった。

その後、家が東灘なので住吉教会に移り、今は平和なカトリック一家となった。ただし父と夫は暗い告解室で罪を告げるのは心に重いと言い、洗礼をためらっていたが、死ぬまでに神に従う心を表せばよいと教えたところ、病気の最中ぎりぎりのところで洗礼を望み、受けることができた。周りの人から天国泥棒と笑われ祝福されたのもうれしいことだった。

単にほほえむだけで、
どれほどたくさんの善をもたらすことができるのか、
わたしたちは、決して知ることができないでしょう。
ほほえみは、人にやさしくふれるようなものです。
わたしたちの命の中へ、
神様の真のひとひらを運んできてくれるものです。

マザーテレサ

１００の言葉より

目次

《 恵老の日 》

M.T.

主と共に働く我らは　主と共にその実りを味わう

―教皇様と共に祈りましょう―

２０１３年９月１５日　赤波江神父様の用意してくださったフランシスコ教皇様とアシジの聖フランシスコのカードに印刷し、これを私達７０歳以上の人達がいただきました。**♪・・・主と共に働く我らは　主と共にその実りを味わう・・・♪**　と歌いながら教皇様のお姿を思い浮かべている私達です。この年齢まで生かしていただいていることは、私にとってどんなに感謝しても感謝しきれないことなのです。振り返ってみれば思いがけず急性虫垂炎で緊急手術（痛みで診察を受け検査の結果すぐ手術とのこと）腹膜炎まで起していましたが皆様のお祈りのおかげで２００１年１０月１０日より２５日までの２週間で退院することができました。後程先生のお話ではお腹を開けばひどいことになっていて大変だったとのこと、命をいただいたことを有難く感謝いたしております。そのおかげで夜２時３時までお仕事をしていても苦にならず、翌朝は５時半に起きて７時の御ミサに与かれる幸せ、何と神様は素晴らしいのでしょう。常にみまもっていてくださること、支えていてくださることは感謝の限りですが年齢を考える時、さていつまで出来ることかと考えざるをえません。神様にお任せいたします。

整形外科にも何度か入院していますが、同じ病室で過ごした方々のことを思い出しています。それぞれ強烈で悲しい現実でした。私自身も痛みと発熱で苦しく何度も看護婦さんを呼びましたが、もう鎮痛剤は出せませんと言われ、ロザリオはバッグに入ったままなので指で数え同じ苦しみの方達のためにもと何環も唱え続けました。その時の私自身どれほどロザリオによって救われたことでしょう。

１９８５年４月６日洗礼の恵みをいただき、続いてレジオ マリエ活動会員に入会の誓約式、数えますと２８年の年月、レジオ マリエとは・・・何もわからぬまま入れていただき御教えの道を皆様と共に歩ませていただける幸せを感謝しております。レジオに入会させていただかなかったら今の私はなかったと確信しています。会員と共に主イエス様・お恵みに満ちたマリア様のお導きに従って祈り、お仕事をさせていただく感謝の日々を過ごしています。

さて今年の恵（敬）老の日のお祈りを N　さんと私は立って、皆さんと一緒に読み、神父様より祝福をいただき心の引き締まる思いでした。ミサ後お祝い会、おもてなしいただき楽しいひと時を感謝しています。教会学校の子供さんより心をこめて作ってくださったカードも頂きました。　いつまでも　お元気で　とウサギさんがリボンを付けた可愛いカード今もお部屋に飾っています。長女夫婦から敬老のお祝いを送って

もらい、残された命を大切に、私に出来るお仕事は心をこめて誠実にさせていただき、常に明るく過ごしたいと思う毎日です。

12 月に入り主の御降誕が近づいてまいりました。先月はクリスマスカードを５０枚作りました。カード作りもレジオに入れていただいてからの私のお仕事、70 歳以上の方と御病人の方の霊名（洗礼名）の祝日に、その方の霊名の聖人、又はその季節のお花をはがきに印刷し、皆様の御霊名の祝日のおよろこびとそれぞれ詩編や聖書から選んだみことばを入力しお届けしています。　　パソコンに入っている中から。

神よ、すべてを越える
あなたの名をたたえ、
あなたに感謝を
ささげることはすばらしい。

詩編九二・二

あなたのいつくしみに
寄り頼み、わたしは あなたの
救いを心から喜ぶ。
神をたたえて歌おう、
恵みを注がれた神に向かって。

詩編一三・六

マリア様の お導きをいただきお恵みに満ちた
恵老の日々でありますように。

神に感謝

目次

《終末期を考える集い》

第３回「超高齢社会での終末期医療に思う

13・9・22（日）

今年　宣教・司牧チーム主催のプログラムで「終末期を考える集い」が３回行われました。

第１回　2013・2・10　（日）　「看取り体験と医療の現場から」

第２回　2013・6・　2　（日）　「高齢社会と終末期医療」

第１回、第２回と多数の方のご出席があり、T 先生の資料のスライドを拝見し、出席者の中の介護の体験者のお話を聞かせて頂きました。

第２回（６月２日）に参加なさった K 先生

（前列右端）

今回は最初に８月に帰天なさったルカ T.T.氏のために一同でお祈りを捧げました。同氏はお医者様でありサッカー界の功労者でいらっしゃいました。この集いに第１回第２回ともお元気で出席して下さっていました。

そして、カトリック信者として立派な最期の時をお過ごしになったお姑様を昭和６０年にお家で看取られた N さんのお話を伺いました。

「母は根底に信仰をしっかり持っていた人でした。延命はしない・・・自然にその日を迎えるという考えで暮らし、死に向かう準備がきちんとできていました。亡くなる日も家族と一緒に十字架の道行をし、最後に十字をしっかりと切ってから一刻の後に静かに天国へ召されました。T 先生に家での看取りをご相談しましたら、家族みんなで寄り添って苦しみを共に出来るならできるというお言葉を頂いて家での看取りを決心し見送りました。」とのこと。

T 先生は その頃教会にごぶさたでいらしたのですが、このご母堂の最後を診ていらして信仰のある方の姿から教会へ足が向くきっかけを頂いたとお話し下さいました。ここに書ききれない先生のお話、皆様のお話 がたくさんありました。**収録された CD がホールのトレイの上に貸し出し用においてありますのでご利用下さい。**

最後に T 先生から「超高齢社会での終末期医療に思う 」という題でメッセージを頂いていますのでご覧ください。

超高齢社会での終末期医療に思う

日本人の平均寿命が 2012 年、男女共に前年より延びて女性は長寿世界一に返り咲いたと、この夏に新聞報道がありました。 さらに日本人の寿命はまだ延びる余地があるとされています。

その国の人口のうちで高齢者（65 歳以上）が 7%以上を占める社会を高齢化社会、14%以上になると高齢社会、そして 21%を超えると超高齢社会といいます。欧米社会が高齢化社会から高齢社会を迎えるのに 100 年近くかかっているのに対し日本はわずか 25 年間で到達しました。

そして、すでに超高齢社会に突入しており、今後も毎年 100 万人ずつ高齢者がふえてゆくとされています。

健康寿命が延び、元気な人ばかりであればいいのですが、高齢者は生活習慣がもとで様々な病気を発症しやすい状態になっています。その上すでにいくつもの慢性の病気を持ち合わせている場合が多く、一度発症すると重症化しやすく入院加療も長引く傾向にあります。

高齢者の多くは住み慣れた自宅で最期を迎えたいと希望されているのに日本では 8 割近くの方が病院で亡くなられています。しかし超高齢社会を迎えた日本の社会情勢から、これまでのような病院を中心とした医療体制だけでは高齢者への対応は困難となります。今後は在宅を中心とした医療や介護が必要とされ、在宅での看取りなども増えてくると考えられます。

また、人の寿命が延びることによって死に行く過程も長期化するようになり、終末期の医療、特に延命治療などで活発な議論が行われるようになってきました。その一つに　胃婁があります。

最近、胃婁を造設された高齢者の終末期の悲惨な姿などがテレビや新聞などで大きく取り上げられるようになりました。そして“人生の終末をどのように過ごすか”などをテーマに各地で講演会が開かれたり、終末期医療についての本が沢山出版され大きな関心を集めています。

日本老年医学会では、「高齢者の医療とケアにおいては苦痛の緩和と生活の質を高めることが最も大切なことで最大限に配慮されるべきである」として、「患者本人の尊厳を損なったり苦痛を増大させたりする可能性があるときは治療を差し控えたり、治療からの撤退も選択肢と考える」という立場表明がなされ、多くの医療関係者から支持されるようになってきています。

尊厳ある死を望むなら、自分の意志がはっきり伝えられる間に自らの意志で延命治療を行わないように明文化しておくこと（リビング・ウィル）や終末期での治療の選択だけでなく、過ごし方などを事前に話し合い書面に残すこと（事前指示書）などを作っておくことも必要かもしれません。

この機会に“いのち”について　もう一度見直しておきたいものです。

目次

≪セニョール・デ・ロス・ミラグロス≫　　10 月 20 日（日）

世界宣教の日、神戸地区のセニョール・デ・ロス・ミラグロス（奇跡の主）がペルー、その他スペイン語圏の御客様をお迎えして今年も住吉教会で祝われました。

オプスデイのラモス神父、赤波江神父によるスペイン語、日本語二か国語ミサに引き続いて、出会いの広場から園庭を回る聖行列が祈りの歌と共に静かに行われ、準備されたペルー料理の昼食の後、色彩も鮮やかに飾り付けられたホールで様々なアトラクションが行われました。

あいにくの雨でしたが、大勢のお客様と住吉教会のメンバーといっしょに今ではすっかり住吉教会の行事として大切にされているこの日を、祝い楽しみました。

かわいい民族衣装の
子供たち

目次

≪　亡き方の為の祈念ミサ・追悼式　≫　　１１月３日（日）

ミサの中で神父様より、この１年間に天に召された９人の方々のお名前が祈りと共に読まれました。皆様お元気で教会に来られていた頃はご一緒に祈り、歌い、教会の楽しい行事や働きの中で色々な事を教えて下さいました。お年を召されてからのお姿から「神様は最後に祈りという素晴らしい仕事を下さる」「謙虚に人のお世話になり・・・」という言葉も学ばせて下さいました。素晴らしい俳句をすみよしに寄稿下さった方、鈴のような美しい歌声で聖歌隊を盛り上げて下さった方、医者という仕事と共に日本のサッカーに多大な貢献をされていた事を最後のお見送りで知った方、大切な仕事の途中で図らずも病を得られた方からは、その時を「新しい人生の記念日」と言われ、不自由なお体でありながらこれまで出来なかった事を楽しんで過ごされたとお聞きしました。ご家族を先に送られお一人で晩年を過ごされた方のお別れは、施設でお世話下さった方々が参列され共に聖歌を歌って下さいました。どの方にもこの教会で共に歩んで下さった日々を想いだして感謝し、新しい命を得られて安らかに憩われますようにと皆で祈念しました。
又、ミサの始まる前に其々が今は亡き家族、友人、知人にメッセージを添えた小さなカードが祈りの花束として捧げられました。小聖堂内では祈念堂の戸が開かれ、その前に焼香台が準備されており、故人を偲んで祈りを捧げる人の列が長く続きました。

目次

トレードマークの白い顎ひげのお姿で
奥様に付き添われ、杖をつきながら
ゆっくりと聖体拝領の列を歩んで
おられた中村様の御子息に追悼文を
お願いしましたところ、次の文章を
寄せて下さいました。
想い出と共に掲載させて頂きます。

「父という人」

ペトロ　S.N.

父アウグスチヌスJ.Nは２０１３年９月２７日神様の下に参りました。神父様をはじめ住吉教会の皆様方には日頃からご厚誼を賜り、父の人生の最後が神様のお恵みにあふれるものにしていただきましたことを、心から感謝いたします。

父は大正１４年、静岡県の浜松に４人兄弟の長男として生まれました。私が知る限り好奇心が旺盛で何事にも一生懸命取り組む人でした。また物事をプラス思考で考える人でした。

幼い頃は、机の中に内緒で蛇を飼っていたようなやんちゃだったようですが、その後結核を患い１年間休学しています。ただ悪いばかりの思い出でも無いらしく「俺には同級生が人の２倍いる」と言って自慢していました。戦時中は、血気盛んな学生だったようで、特攻隊に志願したそうです。合格が新聞に載り祖父母に説得されたものの、逆に祖父母が憲兵に呼び出され、「子供の殊勝な心根に対し反対をするとは何事か」と詰問されたそうです。当時の軍部の高官が、将来十分に学業を積んだ上で入隊した方が日本のためだという判断をして、許してもらったとのことです。本当のことはわかりませんが、祖母が「日本はこんな幼な子が今すぐ戦争に行かなければならない程の状況ではないはずです。」と命懸けでかけ合ったとも聞いています。

その後約束通り海軍を目指し、水産講習所（今の東京海洋大学）に進み、航海士になります。若造の上官の言うことを簡単に聞く船員達ではないので、皆の前で酒を一気飲みして、「もう一杯よこせ」と啖呵を切ったら、やっと認められるようになったと笑っていました。

体を壊して船を降りたあとは、商社に就職しその頃盛んだった化学繊維関連の営業マンとなります。倒産を経験しても取引先の大手の商社に拾われ、オイルショックもプラスに働き、中途採用の割には思ったような仕事が出来たようです。
自分は本当に運が良いとよく言っていました。大家族の長男だったこともあり家にお客さんを呼ぶのも大好きで、会社の方を呼んだり親戚が大勢来たりする賑やかなことが好きでした。自分でもよく手料理をして、凝り性なので特に釣った魚は盛りつけにまでこだわりました。

最後の何年かは、故郷の浜松で自分が望む役職で仕事ができたようです。単身赴任でしたが、周りが幼馴染ばかりで融通が効き、公私ともに充実した生活を送ったようです。ただその頃の父は、学生（特に浪人して自信が全くなくなっている頃）の私にとっていつも自信に満ち溢れ、近寄り難い存在でした。たまに神戸に帰って来ても第一声が、「俺の目の前で勉強できない奴が見えないところでやっているわけがない」などと言いました。
目的意識もなく、だらだらと過ごしているように見える子供達や若者に対して、容赦なく叱咤しました。酔うと「人間は自分の意思で誕生は選べないが、死は自分の意思で選択できる」などと語ることもありました。

父は家族の中で一人だけ無神教でした。そんな父を当時は理解できませんでしたが、今自分がその時の父の年齢に近くなり、気づくと父が言いそうな事を言っている自分がいます。仕事への責任と重圧、家庭を守ること、世間に対していつの時も堂々と胸を張って生きること、どれも言葉で言うほど簡単なことではありません。今思えば戦争で生き残った父には、いつでも身を投げ出して勝負する武士道に似た“潔さ”への憧れがそう言わせたのかもしれません。

そんな父が変わるきっかけが祖母の死でした。私が大学に入った年に祖母が亡くなり、突然父はカトリックの洗礼を受けました。祖母は亡くなる寸前まで頭もはっきりして元気でした。三人の妹達が交代で看病し、最後に父が看護した後、本人も一緒に十字架の道行を唱えながら旅立ちました。神様を信じ、疑いもなく天国へ行った祖母の姿が、父に信仰への決心をさせたのだと思います。
在宅介護で祖母を看取った母に対して、その後優しい気遣いを見せるようになりました。それから父は、聖書や祈りに家族の誰よりも熱心になりました。まるで修行しているようでした。前立腺がんを患ってからは何度か入院し、肺炎になった時はもうダメかと思いましたが、その時でもロザリオは忘れませんでした。
最近の口癖は「自分は本当に運の良い人生だった。ただ一番運が良かったのは、母と結婚できたことだ。」と母を持ち上げました。祖母を看取り、自分を全身全霊で介護してくれることに対しての本音だったと思います。在宅看護になってから、私は遠くにいて何もできませんでしたが、母や姉たちの献身的な姿は息子として弟として頭が下がります。また神父様方、主治医のＴ先生が本当に良くして下さいました。最後は家族が疲れ切ったところを見ていたかのように、綺麗に天国へ逝きました。今が一番良い時なのでこのまま眠りたいと言い続けたそうです。まさしくその通りとなりました。
少し変な考え方かもしれませんが、父は祈りによって神様の意志に近づき、結果として若い頃から望んでいたように、自分の意志によって“潔く”死を迎えることができたような気がします。家族に寂しさはあっても悲壮感がないのは、神様の意志がそこにあるからではないでしょうか。
神さまに感謝します。

目次

≪バザーを終えて≫

今年のバザーは、東日本大震災復興支援バザーの三年目として１１月１０日に開催されました。　「雨」との予報でしたがミサの間一時的に強く降ったものの開始後はパラパラ程度。　出会いの広場のテントでも歓談される方々が見受けられました。

幼稚園保育室には昨年と同じように、雑貨・手芸・ホーリーコーナー・インド雑貨のお店が並びました。　今年、リサイクルの陶器は雑貨とは別に陶器市として売られ、雨が上がった後はルルドのマリア様の前に店開きしました。　もし朝から晴れていたら、通りがかりの方も入って来られて楽しんで頂けたかなと少し残念でした。リサイクルは２階和室に。　ゆっくり見て頂けたのではないでしょうか。

食べ物は住吉名物のタイカレーにビーフカレー・おでん・あんかけ焼きそば・焼き鳥・おぜんざいの手作りメニューに加え、巻き寿司とコロッケ。それにペルーの方たちからは、ペルー料理 50 食を提供していただきました。園庭では大人に混じって中高生・青年学生チームが焼き鳥を香ばしく焼き上げ、売り上げは上々でした。　パウロ三木ホールでは、喫茶と子どもたちの輪投げ。最後はビンゴで賑いました。子どもたちがエプロンをつけてテーブルの後片付けやお運びのお手伝いにも挑戦。ゲームの場やお手伝いの場があって子どもたちも楽しかったようです。

今まではバザーといっても、私が担当する喫茶という小さい部分を見ていればよかったのですが、今年は全体の流れを把握してことを進めて行かなければならない中で、旧役員の方々の全面的なお手伝いをいただきました。　また雑貨やリサイクルの仕分け・値段付け、食券のこと、保健所への提出書類、備品の準備など本当にいろんな所でいろんな方々が時間を割いて手伝って準備し、バザー当日を迎えました。

当日は、「当日だけのお手伝いだけど・・・」とおっしゃりながら手伝って下さった方々も含め、売り場で、台所で、場内の警備や放送で、ゴミの整理で、後片付けで、いろんな所で皆さまの笑顔とお働きがあって楽しくバザーを終えることができ、本当に感謝いたします。　ありがとうございました。
また、快く園舎を使わせてくださった園長先生はじめ先生方にも心よりお礼を申し上げます。

神さまへの感謝とともに

バザー実行委員長　　M.N.

ようこそトゥアンさん

あんかけ焼きそばコーナーです。

おいしいペルー料理

目次

≪幼児洗礼式と七五三のお祝い≫　　１１月１７日（日）

ミサの中で赤ちゃんの洗礼式と七五三のお祝いがありました。

洗礼おめでとうございます

クララ　Y.H.ちゃん

神様の限りない祝福が幼子の上に注がれますように・・・

お父様のご挨拶から
一緒にお祈り下さいましてありがとうございます。
今クララという洗礼名を頂きました。
聖クララのように社会の人々に明るく光をともして
くれる女性になってほしいと思っています。
夫婦力を合わせて、この子を育てていきたいと思って
います。皆様にもお力添えを戴ければ幸いです。

クララとはイタリア語で「光とか明るい」という意味があります。この名前のとおりこの子が光や明るさをもたらす者となりますように・・・赤波江神父のお言葉より

七　五　三　おめでとうございます

１．	M.T.	ガブリエラ女	６歳
２．	Y.T.	ルカ男	５歳
３．	M.T.	マリア女	５歳
４．	R.O.A.	女	３歳
５	A.O.A.	男	７歳

かわいい女の子と男の子の七五三のお祝いがありました。今や住吉教会恒例になった「おたちだい」インタビューにみんな自分の言葉で思い想い答えていました。

好きな食べ物は？⇒　おすし・・塩のかかったフライドポテト・・チョコレート・・
ブロッコリー・・　シチュー・・　パン・・
将来何になりたい？⇒パティシエ・・　今、考え中！・・　人形やさん？・・　etc・・

何がすき
ですか？

大きくなったら
何になりたい？

赤波江神父のお祈りより
慈しみ深い神よ、あなたは幼子の口を通して賛美を全うされました。今イエスの姿を宿す幼子の上に豊かな祝福を注いで下さい。あなたの恵みによって、信仰、希望、愛の内に心身共に成長し、神の子として豊かな人生を過ごす事ができますように・・・

目次

≪図　書　紹　介≫

１、教皇ヨハネ二十三世回勅「パーチェム・イン・テリス」－地上の平和―

マイケル・シーゲル訳　ペトロ文庫

最近は回勅や教書などは滅多に読まなくなったが、夏にこの本が出たときはなつかしさのあまり思わず購入してしまった。「なつかしさ」というのは変な言い方だが、50 年程前、いつどこで手に入れたか忘れたが、この回勅の英訳を入手し（日本語訳はまだ出ていなかった）、カトリック学生連盟の仲間だった友人と辞書を引きながら読んだかすかな記憶がある。

ヨハネ二十三世は就任当初は素朴でパットしない印象を与えたが、第二バチカン公会議開催を決め、歴史に残る教皇となった。折しも公会議開催中にキューバ危機が起きた。1962 年 10 月、ソ連のフルシチョフがキューバに中距離弾道ミサイルを持ち込み、米ソ対立の重大局面を迎えたが、アメリカのケネディ大統領と交渉の結果、ミサイルは撤去され、危機は回避された。

この回勅はキューバ危機を契機に発布され「正義・英知、そして人間の尊厳の尊重のためには軍備競争に終止符が打たれること・・・核兵器が禁止されること」を全世界の指導者に訴えている。教皇はその後まもなく帰天されたので遺言のような回勅となったが、東西いずれの陣営でも熱狂的に歓迎された。平和を願うメッセージと共に、少数民族の処遇についても触れており、民族問題は永遠の課題だと改めて感じた。

２、「日本史のなかのキリスト教」　　長島総一郎著　PHP 新書

本書はキリスト教（特にカトリック）が、中世以降の日本にどのような影響を及ぼしたかについて、黎明期、発展期に活躍した人物の紹介や、日本に影響を与えた聖人等にスポットを当てて、一般向きに解説したものだが、私たちにとっても先達の偉大な働きを手短に知ることができる書物といえる。

著者は経営コンサルタントとして 50 年間に 500 社の経営指導にあたる一方、1941 年にカトリックの洗礼を受け、在世フランシスコ会の会員でもある。

取り上げられているのは殆どが馴染み深い人たちだが、岩永マキという人のことははじめて知った。浦上四番崩れで父と妹を死なせたが、気丈な彼女はド・ロ神父を助けて、九州北部に蔓延した赤痢患者の治療と介護に尽力するとともに、300 人近い捨て子や孤児を引き取り養育した「女部屋」（後に「お告げのマリア修道会」という名の女子修道会となる）のシスターである。長崎のマザー・テレサといわれている。

ヨゼフ　N.K.

目次

《　後　記　》

クリスマスおめでとうございます。
暑い長い夏が過ぎ、心地よい秋は少しの間でしたが自然はきれいな紅葉を見せて私達を楽しませてくれています。
まわりに御病気の方達がいらっしゃいます。御降誕の幼子からお恵みと慰めが沢山ありますように。

聖夜劇　幼基督　しゃっくりこ　　中村草田男

(M.H.)

クリスマスを迎え、待降節の４本のろうそくにも光が灯りました。
先日読んだ、河合隼雄さんと小川洋子さんの「生きるとは、自分の物語をつくること」という対談集の中に印象的なエピソードがありました。いつも「望みを持っていなさい」と言っている河合さんが、ある時「望みがない時にはどうするのですか」と聞かれ、たまたま目の前にいた見知らぬ人が**「のぞみのないときはひかりです」**と答えた・・そこは新幹線の切符売り場だった・・というもので、河合さんはその言葉、その偶然に感激されたそうです。
私たちキリスト者にとって、より深い意味を感じる言葉です。自分自身では「望み」も失いかけた時でも、神様の「光」を頼りに生きていく、**「のぞみがなくなっても、（かみさまの）ひかりがある」**という言葉。困難にある時の支えにしたいと思いました。

(H.H.)

《教会案内》

ミサ

日曜日（主日ミサ）	9:30（日本語）
月・水・土曜日	7:00（日本語）
火・金曜日	9:30（日本語）
木曜日	18:30（日本語）
第 1.・3 土曜日	19:00（スペイン語）

講座

信仰講座	第 1・3 日曜	11:00
信仰の分かち合い	第 2・4 日曜	11: 00
聖書の集い	金曜	10:30.　14:00
教会学校	第 1・3 土曜	14:00～16:00
評議会	第 3 日曜	11:00
野宿者支援炊出し	第 1 土曜 9：30 住吉教会集合	

「すみよし」　第１９１号

発行日　：　2013．12．25
発行責任者　：　赤波江豊神父
編　集　：　広報チーム
発　行　所　：神戸市東灘区住吉宮町
2－18－23
カトリック住吉教会
ＴＥＬ　：078-851-2756
ＦＡＸ　：078-842-3380
http://www.sumiyoshi.catholic.ne.jp
製版・印刷　：　信徒有志

目次